

## 第6回 局地的豪雨による被害軽減方策検討会（2011.2.9開催）結果報告

開催日時：2011年2月9日（水）10:00～11:50

場 所：ひょうご共済会館 5F ツツジ

参加者数：委員10名、オブザーバー2名、一般傍聴者（マスコミ含む）5名

### ◆ 議事概要

#### ● 報告事項：局地的豪雨防災シンポジウムについて（資料-1）

- 基調講演では、中央大学の山田先生に「近年の局地的豪雨災害の特徴」、道奥座長には「中間とりまとめの概要」についてご説明いただきました。それから、「社会実験の報告」につきまして宍粟市の岡崎次長のほうからご報告をいただいております。その後、パネルディスカッションでは、「局地的豪雨の最近の被害状況」、「それに対する防災の課題」、さらには「その被害を軽減するために行政・住民に期待すること」という3つの議題について活発な意見交換を行っていただきました。
- シンポジウムの後のアンケート結果で、河川管理者、市町村、住民の連携が今後も大事であるという回答が得られています。

#### ● マイ防災マップ、地区版防災計画の作成について（資料-2）

- ある程度の規模の人が参加していただいたほうが、その現地についてより深く知ることができ、その人たちが本当に何かあったときに自分自身で考えることのきっかけになるのではないかと。
- グループを分けて各班で同じことを並行作業して、全体で意見を集約することで、段々そのグループを絞っていけばよい。参加者は幾らでも多くてもやり方はあるのではないかと。マップをつくることから考えて人数は絞ったほうがよいという効率的な話は望ましくない。
- マップをつくる時に人数制限は別に必要はない。必要なのはいかに地域に根づかせていくのかということと活用されていくのかということである。継続性のところに、つくったときに参加しなかった方がいかに入っていくのかというような仕組みづくりというのを考えていけばいいのではないかと。
- どういう正解の地図をつくるかということが問題ではなく、その地図づくりを通じた、関係者のコミュニケーションをいかに続けていくのかということが大事なのではないかと。
- つくるステージとそれを活用してまちの人みんなで歩いてみましょうというイベントは分けて考えてはどうか。
- 今回のような、こういうところを見ればいいのだという視点を整理すれば、他の地域でマップをつくるときの参考になるのではないかと。
- 「5W1H」を考慮した観点から問題点とか注意すべき事項を整理するというのも可能ではないかと。

- 地図というのはつくった時点で古い。描いた時点で既に過去であって、どんどん現実と常に違うということをどう整合させていくのかというのが常に課題である。そういう意味では、どうやって更新していくのかというのは非常に課題である。
- 地区版防災計画の作成に参加されている方が、見た感じだと非常に少ない。人数が少ないほうが意見はまとまるというのは重要でしょうけれども、地区版防災計画書は、どなたにどういう風に渡されたのか。また、住民のどれぐらいの方が地区版防災計画を理解した上で避難訓練に参加されたのか気になる。
- 地図づくりのプロセスが大事であるが、最も大事なことは、いろいろな立場の方の持っている目というか、視線の違いである。専門家の方は専門家の方なりの目を持っているし、地域住民の方は地域住民の方なりの目を持っているので、その違いの部分がお互いに、ああ、埋まったなと、自分たちだけではわからなかったことがわかったなと、あるいはできたなというふうに思える実感を、大げさに言うと最大化するようにこの種のプロセスは組み立てられるべきである。10人とか数人の命を守るということになると、お互いだけが持っている小技を動員するということはすごく大事である。
- 住民参加のまち歩きというときに、住民の方は住民の方なりの発見があって、それを行政とか専門家は学ぶべきだと、こっちのほうばかりがよく強調されるような気もするのですが、逆もやっぱりすごく大事である。住民の方に専門家の方と歩いたからこそ、専門家の方と地図をつくったからこそ、自分たちが見えてなかったものがこんなに見えてきたという実感が得られないと、何となくまち歩きも一遍目は楽しいのですけれども、2回、3回やっている、いずれ飽きてくるので、そういった工夫がやっぱり一番大事である。つまり、小技を繰り出していかないと長続きしないのではないかなと思う。
- 大学院生が彼らの持つ専門家的小技というのをボランティアの中で発揮するという一方で、自分たちの勉強が社会に役立っているということの実感も得られるし、それから住民の足りないところも活用できる。一方で住民の方からすると、非常に労力のかかる部分をボランティアの方が補ってくれるということで、有意義ではないのかと考えます。
- 保津川での川まちづくりのときのワークショップみたいなのでも、グループをつくって行政の人が1人入られて、ファシリテーター的にやられたのですが、その行政の人にプラスしてもう一方各グループに川まちづくりとか、まちづくりとか環境とかに長けたNPOの方が一人ずつ入って、そういう役割を担っていただいて、結構討議が活性化したという経験から、行政職員さんと地元の方という二極構造だけではないほうがよい。
- 「作成の段階」と「周知活用の段階」と2つあるのですが、「作成の段階」では、キーマンはどういう人なのでしょうか。作成を円滑に進めるというのも一つのキーマンですし、地域のことをよく知っているというのもキーマンである。この役割だけちゃんと補えば、子供でもできますよとなると、これはまたこういう活動はどんどん広がっていくと思う。そのキーマンというのはどういうもので、役割というのはどうだったというのをもう少し分析もしたほうがいいと思う。また、周知活用の段階については、参加できない人が多いという前

提で、どうやって伝えるか、もう少し考える必要があると思う。

- アンケート結果から、逆によくないと言った人の意見に大事なことがあるのではないかと思う。これがすべて良いわけじゃなくて、これはよくないというところにまだまだ改良の余地があったり、先ほどの今後広めていくためのヒントというのが埋もれていたりする見方をし、もう少し分析してもよいかと思う。
- 手近に置かれるハザードマップの作成と河川情報QRコードの掲載について（資料-2）
  - 身近な高齢者を見ている、主な情報媒体はやはりテレビなので、これは地デジ化のほうで進めていただかないと思うのですが、文字情報等々を使ったアプローチのほうが高齢者の方にはアプローチしていただきやすいと思う。
  - 地域のコミュニケーションの中で地図の大きさにしろ、使い方にしろ、出てくるものだと思う。そういう意味でマイ防災マップをうまく皆さんがつくっていただくと、いいのかなと思う。
  - テレビの活用ということで、今兵庫県とはいろいろ準備を進めておられて、この夏の水害時期の前までに整備できないかというので準備している。
  - 自分が認知している周りの状況とハザードマップとのギャップを埋めるために、マイ防災マップをつくるということからだんだん始めていくというような学習体験を通じて、更新されていくというやり方もあるのかなと思う。
  - QRコードの件ですけど、これはリアルタイムの情報とつなぎたいというのがもとの趣旨で、別にQRコードで見ないかなくても、その観測所の情報は、例えば防災無線で聞けますよとか、それだけでも十分である。つまり、リアルタイムにどうつないでいただくかというのがこのポイントであって、その仕組みづくりが大事なことである。
  - ハザードマップをごみの日カレンダーと組み合わせることによって、割と認知としては捨てられなくなってきたのかなというような印象はありますが、裏面に気がつかないというのはかなりの落とし穴だったかなと思う。
  - 避難しないといけないうきに自宅を防災マップの中にシールか何かしておいて、避難所までの経路を自分で考えたときにどこが危ないというようなマップを皆さんつくってくださいというようなことがあればいいのかなと思う。
- まるごとまちごとハザードマップの設置について（資料-2）
  - 民家の壁等に看板を設置するという点について、そういう設置の依頼が行くことによって、また、自分たちの地域、自分の家が前回これぐらいの浸水であったという看板が張られることによって、そのハザードマップの作成とか、そういうところに参加していなくても、看板がついたことによって少し意識に残るのではないかと、それがまたきっかけになっていくのではないかなというふうにする。こういう取り組みのほうがいいのではないかなと感じる。
  - 避難所まで何百メートルとか、入り口はどこがいいとか、それから水深があるところだけに貼っていると、それとも戦略上どういうふうに見せたらいいかという、その辺もノウハウとしてきちっと整理しておいたほうがいいと思う。

- 住民の方でも全部が全部経験できていないのであって、スポンと情報が抜けているところが多分にあったりすると思う。そういうところは行政側がどういうふうに補うかという観点が必要で、行政側が持っている情報と合わせて整理しなければいけないと思う。
- 避難場所まで何メートルですという看板が、どれぐらいの間隔で設置されているのか。ガイドを始めたけれども、途中でなくなってしまったとなると、それではその先どうしていいのかわからなくなってしまう状態が出るので、過去の災害の記録と避難場所への誘導というのは少し分けて設置を考えられた方がいいと思う。
- 例えば、行く途中に、危険箇所があったり、通り越えないといけないところがあったりするかもしれませんので、そういう情報を切り取って、避難所までの地図を看板につけておけばいいのかなと思う。
- まちの中にあるものを活かしていくという観点で、色々なものをみるために誘導する既存の看板はたくさんあって、そういうものの活用を考えることがいいのかなと思う。
- 何の目的の、サイズも含めて、だれを対象に看板を貼るのかというのをもう少し明確にしておかなければだめなのだろうと思う。宍粟市では、車で動けるタイミングで避難勧告を出していこうと思っているので、看板設置については、少し、その辺を考える必要があるのかなと思う。

● 全体を通して

- 一宮町は、平成元年ぐらいに生涯学習推進のまちづく宣言を行ったことや、平成10年ぐらいから、歩いて地域を見直す中から地域づくりを考える事業展開をしていたことから、地域コミュニティをつくる背景、土壌ができあがっていたと思われる。そういうノウハウを色々な地域に広げていくことが、防災面におけるコミュニティや、逆に防災を考えることによって今希薄になっている地域で地域コミュニティがつけられると思う。
- 防災というキーワードを通して一つのそれが横糸になって地域コミュニティを強化するきっかけにもなるのではないかな。